

愛国詐欺

三山 喬

「ホスト真実」と「南米勝ち組事件」

第4回

流言飛語を利用した犯罪者たち

ブラジルで勝ち組運動が盛んだった田園都市マリリアを私が旅したのは十六年前の秋。州都サンパウロ市で知り合った人の紹介で、終戦時、マリリア近郊の日本人入植地で青年会長を務めていた小針一という老移民を訪ねたのだった。

第二次世界大戦最末期の一九四五年七月、ブラジルの一部日本人の間で「臣道連盟」という国粹主義団体が結成され、戦争終結以後、〃日本精神の涵養〃を訴える勝ち組団体として、正会員の家長だけで全土に二十万人以上、家族まで含めれば十万人以上もの人々に影響力を持つ巨大勢力に成長した。

マリリア周辺でも、移民たちの多くがこの「臣連」に参加したが、当時まだ二十歳前後だった小針たち青

年会の若者らは、親世代の会合には加われず、「蚊帳の外」に置かれた。それでも、祖国日本の戦勝を確信するスタンスでは、彼らもまた、親たちと何ら変わらない強固な〃信念〃を共有した。

小針は若者のリーダーとして目立っていたためか、危険人物として当局にマークされた。時には自宅に押し掛けた警官に「日本は負けたと言え」と強要され、これを拒んだがゆえにムチで打たれたこともあった。穏やかな表情で遠い目を振り返る老移民の述懐で、そうした体験談以上に私の印象に残ったのは、彼がほんの一瞬だけ顔を歪め、突然感情を昂らせて何人かの日本人を「国賊連中」と罵ったことだった。

誰かの知り合いだったのか、それとも未知の来訪者

か、詳細はわからないが、終戦の翌年、入植地にやってきた複数の日本人がいた。男たちは小針の知り合いに通貨の両替を持ちかけて、まとまった額の日本円紙幣を置いていったという。

開戦直前から次々と打ち出された差別的政策で、ブラジルの暮らしにくさを痛切に感じていた移民たち。その多くは日本への航路再開と引き揚げを待ち望むようになつていた。来るべき帰国時には、土地や家を処分して旅費をつくり、残余の財産はドルや日本円にして持ち帰る。円紙幣を好レートで両替できるのなら、それを拒む理由はなかった。

ところが、この知人はやがて、受け取った円紙幣が価値のない紙くずになっていくことに愕然とする。祖国日本では、四六年二月、ハイパーインフレの対策として新円が発行され、旧円はその直後から流通しなくなつていった。知り合いは、あの来訪者らに無価値になった旧円をつかまされてしまったのだ。

勝ち組として生きてきた小針は、戦後六十年近くになる私の訪問時も、負け組への敵愾心を引きずつていった。それでもこの「円売り詐欺事件」まで「負け組の

犯行」と言い切ってしまう決めつけには、少々困惑した。多くの文献では、この手の詐欺行為が勝ち組内部に発生した出来事と説明されていたためだ。

だが小針は、違ふという。犯人は、旧円が無価値となったことを知り得る立場にいた、つまり日本の敗戦を事実と知っていた。戦勝を信じきっていた勝ち組の移民には、思いつけない犯罪だというのである。

言われてみれば、もつともな理屈だった。

それでもなお私は、判断に苦しんだ。負け組の指導者らは終戦のあと年が明け、テロの応酬が始まるまで何とかして敗戦の事実を認めてもらおうと、各地を奔走した。結局はこの行為が反感を買い、テロ殺人にまでつながってしまうのだが、一方で詐欺を目論む人間は、決して敗戦の周知など望みはしなかった。彼らの犯罪は、対立と混乱があればこそそのものだった。

詐欺師自らは、敗戦の事実を知っていた。だが、負け組による「認識運動」は、彼らには邪魔なだけだった。勝ち組はどつぷりと妄想の世界にいてもらわないと困る――。

そう推し量れば、彼らは常日頃、〃勝ち組の一員〃として振るまっていたはずだ。

●みやま・たかし 1961年神奈川県生まれ。著書に『ホームレス歌人のいた冬』（文春文庫）、『国権と島と涙～沖縄の抗う民意を探る』（朝日新聞出版）、『一寸のペンの虫』（小社刊）など。